

からあとは賢明なる学生諸賢に語る必要はない。視聴覚情報は1億ビット/秒以上であるが手はせいぜい20ビット/秒以下であることにわれわれは想到しなければならない。

(教育学部教授)

~~~~~ 一言・ふたこと ~~~~~

大学図書館のもっとも重要な使命が、学生にとっても、また研究者にとっても、読みたい本がいつでもすぐ手に入ることであるのは、いまさら言うまでもない。事実、関係者の非常な努力のお陰で、学内の各部局のどこに、どんな図書があるか、総合目録でひと目でわかり、相互閲覧の制度を利用することも可能ではある。

しかしながら、境界領域であるため、あるいは現代の花形というよりはむしろ未来の分野であるため、あるいはまた、きわめて高価であるがゆえに、学内のどこにも購入されていない雑誌や単行本が少なくないのである。各部局の自主性尊重は自明の理にしても、図書の購入が現在のように全くばらばらに行なわれている限り、上のような落とし穴を埋める術はない。一方附属図

書館においては
少ない人員と予算で、かつ

—全学図書協議会の設立を望む—

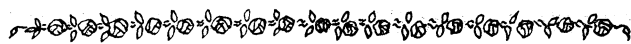
意外な落とし穴を埋めるために

涙ぐましい
ほどのサービス
精神で、活発な
改善を続けてお

られるのであるが、評議会をはじめとする大学の管理機関に対する館長の発言権は無きに等しいときいている。

限られた予算を出来る限り有効に用いるために、全学図書協議会（仮称）を設立し、各部局図書館（筆者の属する理学部には未だないが）から選出された代表者に、附属図書館からの専門委員を加え、各専門分野における第一線の研究者と学生の活動に必須と思われる図書が、学内のどこかに必らず備えられるように、また無意味な重複が避けられるように配慮されることを切に望んでやまない。

(理学部助教授 徳重正信)



われわれ薬学の研究に携わっている者にとって、東端別荘にある学部図書室は小じんまりとしているが何者にも換え難いものである。この活動は学部図書室としての専門分野における独自の機能を十分果している。近年の文献は比較的良く収集されており、ほとんど全ての文献、雑誌、単行本が開架式になっているため、文献、検索、閲覧に非常に便利である。

しかし、なにぶんにも一学部の図書室であるという制限、火災による書物の欠失、かてて加えて昨今の文献の増大、はんらんから不便を感じることも少なくない。巾広い文献の正確かつ迅速なはあく、

供給、専門分野別の
分類、整理、統合さ
らにはこれら膨

—薬学部図書室に望むこと—

今一歩の前進を

大な量にのぼる
図書の保管等に関し
てかなりの試みがな
されてはいるが、今

一歩の前進が望まれる。なおこれらの点については、中央図書館、各学部および研究室の図書室、さらに広く各大学との連係、交換、研究が行なわれることが必要であり、かつ、この意味での再認識を各層に促すことも大切であろう。もっと身近かに、管理、保全のための館員の増員、貸出冊数、開館時間、希望図書購入の扱い方等解決すべき問題は多々ある。学部学生の利用と研究用との間のみぞをどうするかということももっと考慮されてもよいのではないかと思う。最後にさらに薬学の図書室が整備され、発展していくことを期待する。

(薬学部大学院 河谷紘樹)